

街を行く

第74回 ニューオーリンズ New Orleans

旧き良き街に変化の訪れ

10年ぶりに米国ルイジアナ州、ディキシーランドジャズのメッカ、ニューオーリンズの街を訪れました。以前は「フレンチクォーター」という歓楽街（レストランやバーが軒を連ねる観光名所）のいたる所でジャズが聞こえ、ゆったり時間を過ごすことができました。

しかし時代が変わったのでしょうか。どの店からもガンガンとロックが流れ、正統なジャズが聞ける店探しに一苦労させられる有様。とかく忙しい今の時代にディキシーランドジャズはマッチしないのかも。それに10年も経てば街が変わるのも当たり前かもしれませんね。

ジャズと並んで街を表わす代名詞「プランテーション」（大農園）。取りも直さず黒人奴隷の話になります。読者の皆さんは数年前に公開されたアメリカ映画「ジャンゴ」をご覧になりましたか？レオナルド・ディカプリオ扮する主人公はプランテーションのオーナーです。彼が黒人労働者へ酷い仕打ちをするシーンには思わず目を塞ぎたくりました。

右の写真の通り、黒人労働者は粗末な小屋に住まわされ、主人達が決して手を付けない動物の臓物を食べ、一日中重労働を科せられていたのです。彼らは独立戦争後に開放されたものの、多くは小屋に残り1970年代まで働いていたそうです。米国の暗部を垣間見たものですが、ほんの最近まで続いていたのは衝撃でした。

主要産業は観光。米国も日本と変わらず地方都市の産業といったら観光と相場は決まっています。フレンチクォー

ニューオーリンズと言えばジャズ、ゆったり落ち着ける大人の空間



ターとプランテーションは人を呼ぶコンテナツの双壁です。また、皆さんの中にはテネシー河を下る船を思い浮かべる人もおられるでしょうし、「スワンプツアー」というパワーボートに乗りジャングルでワニと遭遇するツアーも盛況。これでもかという具合に数多くのオプションツアーが用意されています。

上手いと感じたのは、街も人も観光客向けのキャラクターになり切っていたこと。観光客を喜ばす役割を演じることに照れも躊躇もありませんでした。もちろん節度が無いわけではありません。許容できる範囲内で徹底的に楽しみ、観光客を喜ばせています。

観光客の中には節度を忘れた若者が暴走する様子も見られましたが、目を伏せる事態までにはなりません。日本で何かイベントがあると、たいてい若者が暴走、イベント本来の主旨を台無しにしてしまいます。ニューオーリンズには節度とルールが出来ているように思いました。今の日本の各観光地も、観光地としてしかるべきルール作りが必要でしょう。また、まちおこしの第一歩はコンセプトと、それに合ったルールづくりかもしれません。銃規制のあり方から分かる通り、米国は手放しで安全と



プランテーションで黒人労働者たちが1970年代まで暮らしていたという小屋

言える国ではありませんが、だからこそ大人が安全に馬鹿になれる空間が存在するというのも事実。この街がその一つであることは間違いありません。まさに大人が楽しめるテーマパークでした。

…ただし、南部のソウルフードには降参。日本食が懐かしい旅となりました。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。